

## 【分科会 20】精神保健医療福祉システムとリカバリー

### ～ “Matto の町” をなくすために私たちにできること～

ファシリテーター: 伊藤順一郎(国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所

／NPO法人地域精神保健福祉機構・コンボ)

福井里江(東京学芸大学)

このワークショップは、そこに参加する1人ひとりが、どのような精神保健医療福祉サービスであったら利用してもよいと思うか、自分としては変革のために何をしていきたいか、などを語り合う場として企画し、今年で3年目を迎えました。

今回は、このフォーラムの前夜祭(イタリア映画『むかしMattoの町<sup>注)</sup>があった』自主上映会)との連動企画とし、映画の内容を1人ひとりが自分に引きつけて考える場にもできたらと考えました。

はじめに、前夜祭に来られなかった方々のために、映画のダイジェスト版を15分ほど上映しました。そしてそこからは、「ワールドカフェ」という方法にもとづいて、対話をおこないました。これは、「知識や知恵は、機能的な会議室の中で生まれるのではなく、人々がオープンに会話をを行い、自由にネットワークを築くことのできる『カフェ』のような空間でこそ創発される」という考え方に基づいた話し合いの手法です。

今年度のテーマは、「“Matto の町” をなくすことを考えてみましょう。あなたはそれが可能だと思いますか? 可能だとしたら、その実現に必要なことはどんなことですか? 不可能だとしたらなぜでしょう。可能にする道はありませんか?」というものです。この「“Matto の町” をなくすこと」については、「『この人たちは、病院に長期入院してもらわなければならない』という選択肢が、医療者にも、家族にも、当事者にも、そして市民にもない世界になること」と定義しました。

1ラウンド目は5人1組の小さなグループで話し合い、2ラウンド目はアイデアの他花受粉のためにメンバーをシャッフルし、同じテーマで話し合いを続けました。そして3ラウンド目は元のグループに戻り、気づきや発見を統合しました。そこでこのテーマは、「“Matto の町” がなくなったら、あなたの生活や考え方、人との関わり方は、どのように変わりますか? あなたは自分の生活、考え方、人との関わりをどのように変えたいですか?」というものです。

どのグループでも、それぞれの立場で、我がこととして、真剣な話し合いがなされました。各グループで話し合った内容を90秒で発表する時間では、次々と絶え間なく手が挙がり、発表者同士がマイクを手から手に渡しながら、熱心な決意表明が続きました。

最後に、「あなたは明日からどんなことをしていきますか?」と問いかけ、1人ひとりがA4用紙に書いたものをグループ内で共有して、今年の分科会が終わりました。

映画という力強い素材にも後押しされながら、現実味のある、そして深まりのある話し合いの場ができたように思います。この場にいた1人ひとりがここで得た気づきを持ち帰り、次の一歩につなげていけたらと思います。

---

注)“Matto の町”とは精神病院のことです。イタリアでは、バザーリアという精神科医の起こした行動が大きな社会運動となって、“Matto の町”を廃止する法律ができ、地域を基盤とした精神保健医療福祉システムが確立されました。